



生徒の質問に答え、福井豪雨の体験を語る小嵐龍夫さん。14日、福井市美山中

被災後生まれの美山中生

当時の教頭と対話集会

命を守る「準備」 福井豪雨学び

2004年7月の福井豪雨で校舎やグラウンドが濁流のみ込まれた福井市美山中で14日、当時の教頭を招いた対話集会が開かれた。被災後に生まれた豪雨を知らない生徒たちは、生々しい体験談を聞き入り、自然災害からどのように自分や家族、地域住民の命を守るかを考えた。

福井豪雨で同校は1階が90%近く浸水し、押し寄せた大量の泥が10〜15センチ積した。当時の生徒139人中50人の自宅が床上、床下浸水した。一方、今年6月、現在の生徒73人の4割が福井豪雨について「詳しく聞いたことがない」と答えたという。当時教頭だった小嵐龍夫

さん(68)は氾濫する足羽川や濁流にのみ込まれる集落、一面が泥の海のようになった学校周辺の記録動画や写真とともに経験を語った。異常な降雨や押し寄せた泥水に「自然への畏敬、恐ろしさを感じた」。一方で、延べ3700人近いボランティアが真夏の暑さの中、同校の復旧活動に汗を流す姿を目の当たりにし「人はすてきたな、すごいなと思った」と語った。

乗原涼太郎さん(3年)は「自分が住んでいるところのハザードマップを見たり、発生時にスムーズに動けるようにしたり、準備しておきたい」と決意を述べた。林愛絵さん(同)は「福井豪雨のことを知り、地域の力になれるよう頑張りたいと思った」と話していた。小嵐さんは「災害は必ずくる。自分が大好きな家族を守るため、頑張つて」とエールを送っていた。(近藤洋平)